

特集：地理教育の現場から

## 大学における地理教育

杉谷 隆

### Ⅰ ヒマワリ曼荼羅

いまの大学は、低水準の学生も混じってくるために丁寧な学習指導をせざるをえず、各種のガイダンスが行われる。一部は1年次科目として単位化もされている。筆者は教務委員長としてそれらの実施に忙殺され、かつ地理学教員としても登壇して「地理学とは何か」を語るべき地位や年齢になってしまった。

むろん筆者も、遠い昔に理学部地理学コース進学内定生として、地理学入門講義を受けたことがある。教養学部人文地理学内定生と合同で、2年次2学期の必修科目だった。担当教授はまず黒板中央に「地理学」と書かれ、周囲に他の諸学問分野をヒマワリの舌状花のように書き連ねていわく、「地理学は諸学の中心である」。

地理学科は、筆者の師匠世代は旧制高校を卒業すれば無試験入学だった、と他の教授から聞いたことがある。北杜夫『どくとるマンボウ青春記』には、旧制松本高校の授業科目で「人文地理」を選択するのは不出来な学生だったという証言もある。「ヒマワリ曼荼羅」はその反動の悲しい強がりだったのだろうか？ 進学生を激励するためのハッタリだったのか？ 学説史研究に裏付けられた深遠な結論だったのか？ 古典的な博物学風味を残している地理学の別表現だったのか？ いまなお先生の真意はわからず、ここに公言すれば30年前の必修単位や卒業認定を取り消されてし

まうが、「地理学とは何か」を考え続けた努力をもって執行猶予してほしい。

1975年入学の筆者の世代においても、大学院進学率が高い理学部のなかで地理学は専門課程への進学最低点が低く、「ここなら自分も大学院に行けるだろう」という不純な思惑から筆者は志望票を出した。肝心の学問的関心からいえば、文化人類学（現在の知識で訂正すれば南方熊楠流民俗学あるいは姫田忠義流民俗学）をやりたかったのだが、理系から文転進学するには点が足りず、似たような人文地理学（当時はそのていどの理解しかなかった）ではどうかと目を移してもやはり点が足りず、理学部地理でも同じだろうと変転した末の選択だった。

そして予期しなかったことに、地形学を専攻することになった。これはひとえに先日他界された吉川虎雄先生の学識や人格に惹かれたためである。大学院中退後の筆者は、また変転して現在まで文系の職場にある。しかし、「地形学Ⅰ」終講の「地形学の社会への寄与」の教えは、形を変えつつも守っているつもりである。ご冥福をお祈りいたします。

現在の地理人気についても、入試倍率高騰といった業界情報を聞いたためしがないから、不人気は幾世代にわたって遺伝的に固定された形質といえる。本誌の読者には、「地理学は面白い」と信じている古手や、あるいは「地理学の定義なんか関係ない」という若手も多いだろうが、本稿は

そういう幸せな経歴や基本認識に立脚してはいない。「地理学は難しい」以外の何物でもない。かつて筆者が日本地理学会の若手使い走り委員として学会事務所にいたとき、居合わせた会長が「地理学はこんなに面白いのになぜ学生が来ないんだろう」と雑談しているのを聞いたことがある。個人的に面白いのは勝手だが、そんな甘い状況認識の人物が会長では先はあるまいと筆者は思った。しかし、地理学が雲散霧消してもいいとは決して思わなかった。

「地理学は面白い」と発言することは、布教活動と同じ本質の独善である。むしろ面白くないという前提で、興味を引きそうな題材でわかりやすい授業をすることに筆者は努力する。その結果が面白いかなかは受講者個人が判断することである。筆者の一般教育科目では2割前後が絶対評価(お茶の水女子大学でも高知大学でも同じ基準)でAをとり、そのうち数人は満点に値する答案を書いてくれる。それをもって、自分はまだ在職していてもいいだろうと安堵する。

本稿に独特異様な風合いがあるとすれば、それは筆者の経歴や価値観、およびそれを支えてきた独特の異才に由来する。あるいは、南海の密林に敗戦を信じず頑なに潜伏する帝国陸軍少尉に通じるものもある。したがって、普遍性に疑問があったが、筆者の時代を活字に残すべきだと考えなおして原稿を引き受けた次第である。

## II 浮動票の獲得

お茶の水女子大学や高知大学のように、文学部系などの広い募集枠で入試を行う大学では、冒頭に述べたような専門課程への進学ガイダンスが必要となる。2または3年次からは専門分野(ここで地理学の名称が出てくる)に分けて卒業論文まで指導するので、一定の教育体系が求められる。講義、実習、文献講読、巡検、演習という科目構成は全国共通だから、本稿では説明を割愛する。

学科やコースなどの教育課程名称として地理学の看板をひとたび掲げれば、一揃いの科目が必要になるので、教員数が少ないほど教員一人の教育負担は大きくなり、かつ広範な学識が求められる。

募集枠を広くする利点は、地理学科単独だと発生しやすい合格最低点の底上げが、かなり抑制できることである。その反面、入学直後の学生に進路志望をきくと、「地理学」と答える学生はほとんどいない。それをいかに増やすかが1年次での勝負どころになる。むしろ、安易に卒業できそうな甘言で釣れば学生は集まるだろうが、本稿の論調がそこにはないことは明白である。

筆者は、文学部系のなかで地理学は特異な分野だと考えるので、少数精鋭の方針をとる。精鋭でなくても、勉強意欲を持ち、学問の輪郭を理解している確信犯であってほしい。ガイダンスや講義・演習・実習をきちんと実施すれば、おのずと学生自身による自主的な選別が行われるが、それは他分野にはない苦勞のように見える(実際の授業負担も大きい)。少数が実際に何人を指すかといえば、国立大学法人では教員1人につき卒論生が3人いれば将来の解雇対象者にはなるまい、と筆者は計算している。このノルマは、お茶の水女子大学での講師採用時から現在まで自分に課している。

読者はここで、「人文地理学ならともかく、自然地理学にも毎年3人来るのか?」という疑問を持つだろう。その通り、普通ではありえない。吉川先生のように志望をねじ曲げるほどの磁力があれば話は別だが、筆者は自分のほうを曲げてテーマの自由度を高めて学生を受け入れているわけである。前述した経歴はどうであれ、地理学教員は筆者が選んだ職業であり、職業人として(趣味人としてではなく)やるべきことがある。

しかしながら、高い自由度というスタンスには陥穽が伴う。卒業論文発表会で密かに配られる『卒論生から後輩への伝言集』に、指導学生が「先生の博識に支えられて自然地理学ゼミは何でもあ

り」と宣伝してくれるのは嬉しいが、この文言が一人歩きしては困る。前述のように学生時代の筆者自身がお粗末な学問観しか有していなかったとはいえ、教員となったいまはこれを放置するわけにはいかない。

また、2名の地理学教員（筆者と後藤拓也准教授・農業地理学）でやれる教育量は、地理学の広範さに対して圧倒的に少ない。制度的な必修単位履修からいきなり卒論研究に進めるわけではないので、「やりたいテーマについて自分で勉強しておくように」という忠告が手遅れにならないようにしなければならない。

そろそろ筆者は、ヒマワリ曼荼羅に代わる杉谷バージョンを提示していかなければならなくなったようである。学生時代に引き戻されて「地理学入門が不合格につき追試を課す」という悪夢を見ている気分である。

### III 地理学はロマンもないし頭も悪い

なぜ地理学が不人気なのか。そこから地理学の本質が見えてこないだろうか。

有力な定説は「暗記科目だから」。しかし、同じ暗記科目とされてきた歴史学には確実な固定客があることが反証となる。高等学校までは、どんな科目でも基礎的事項を覚えることが主であろう。思考力や独創性というものは、膨大な知識から立ち上る湯気みたいなものだ。一方、センター試験では理系受験者に地理A選択者が多いといわれている。彼らは、地理を「受験場での論理的判断のみで正解できる設問が多い社会科」と考えているはずだから、「地理は暗記科目」という風評は根本的に疑ったほうがいい。

もう一つの定説は、「高校で世界史が必修化して地理が開講されないから」。これは負け犬台詞である。心理学や社会学は、明示的に対応する高校教科目がないにもかかわらず人気があることが、有力な反証になる。

筆者に言わせれば、地理が相対的に不人気な理由は、「ロマンがないから」と「頭が良さそうに見えないから」である。相対的にと断ったのは、不人気が目立つのは文学部系にいるからではないかと思うからである。筆者のガイダンスは「開き直り方式」であり、この2点をはっきりと打ち上げてから、その意味を説明することで地理学の特徴を出そうとする。これは1年生にとって極度に難解な話になるが、人間文化学科生約100人のうち3割ほどの有志が、「地理学にもこだわりがあるらしい」と漠然と理解できればいいと考えている。

まず第1点について。推薦入試の面接試験者をしていると、歴史や古典文学にはロマンがあるという趣意の発言に接することがある。これは文学部特有の臭い台詞であり、過去の事件（例えば龍馬暗殺）が現在の自分の存在を直接に脅かすことがない、という安心感や現実逃避感を「ロマン」と粉飾しているにすぎない。一方、現在の事件（例えば隣町の通り魔殺人）は自分を直接に脅かすから、できれば知らずにいたいという精神的な防御本能が働く。さらに、ヒトの自己認識が、時間軸上の記憶に専ら基づいており、空間軸上の現在地ではない、ということも関係するだろう。ヒトにとっては、時系列的な原因—結果論のほうが、空間要素群の相互作用論よりも直感的に理解しやすいのである。脳が処理しやすい情報だと、脳内に未利用域や快感物質が生じるのかもしれない。それが「ロマン」の正体ではないのか。筆者の結論は、「地理学には現実世界に関心がある人が来てほしい」。なお、誤解のないように付言するが、ロマン発言をした受験生に筆者が低い点をつけることはなく、聞き流している。

第2点。文学部系で頭が良さそうに見える分野は、心理学や社会学、文化人類学である。純粋に思弁的な哲学も頭が切れそうだが、言うことが凡人にはさっぱりわからない。心理学などが頭が良さそうに見える理由は、理論（と彼らが主張する

表1 地理学の分野

「日本地理学会」2005年版会員名簿（会員総数3119名）から専門分野を抜き書きし、  
 杉谷が若干の分野を加えて分類・作表。「○○系」はこの作表のためのみの用語である。

人文地理学	産業系	経済地理学	工業地理学 農業地理学 水産地理学 林業地理学 観光地理学 地域経済学 伝統産業 交通地理学 流通地理学 商業地理学	工業立地 工業立地
		文化・歴史系	文化地理学 宗教地理学 民俗地理学 民族地理学 歴史地理学	地域開発論 比較文化論
	集落系	集落地理学	都市計画	
	社会系	都市地理学 農村地理学 人口地理学 社会地理学	人口移動 エスニシティ 女性地理学 高齢者研究	
	計量・行動系	開発地理学 計量地理学 時間地理学		
	政治系	政治地理学		
人文地理+ 自然地理 複合系	環境系	環境地理学	環境認識論 自然保護論	環境教育 環境計画 環境政策
	資源系	災害論・防災論 風土論 土地利用 資源学	水資源	

自然地理学 自然環境学 第四紀学	気候学	気候変動論 都市気候学 気象学 雪氷学	古気候学
	気候+地形複合系 地形学	気候地形学 地形発達史学	寒冷地形学 平野地形学 河川地形学 変動地形学 火山地形学 実験地形学 物理地形学 砂防学
	地形+陸水複合系	地形営力論 応用地形学 河川地形学	斜面形成営力
	陸水学	海岸地形学 水文学	サンゴ礁研究
	海洋学	湖沼学	河川水質 流域環境 水資源 海洋環境
	生物地理学	植生地理学 土壌地理学 地生態学 緯地学 医学・疾病地理学	
一般地理学	地理学史	地理方法論 地理文献学	
	地理教育	地理教育史 社会科学教育法	
	地図学	測量学 地図史 GIS・地理情報 土地利用	測地学 リモートセンシング 地理写真
	景観論		
	空間論	空間分析 環境認知	
	地誌学	地名学 地域研究	地域論
	応用地理学		

もの)や学説という支柱があるために、演繹的に研究することができ、結果について明瞭な物言いができ、したがって他人が理解しやすいからである。しかし、これは物事を単純化してきているからに他ならず、必ずしも知として上等というわけではないと思う。

地理学は博物学的・記載学的な性格から理論化の方向をたどらなかつた。森羅万象を整理して記載する(したがって最終的には、言語化や、規定原稿枚数に収めるだけの単純化、多次元現象を1次元の文章に投影することは行っているわけである)にも相応の知力と平衡感覚が必要なのだが、世間様はそれを理解できないので頭がいいとも言わない。筆者の結論は、「地理学には適度に頭が悪い人が来てほしい」。頭がいいと現実を見落とし、悪いと現実の本質を見抜けない。

地理学の歯切れの悪さを換言すれば、実在の地域が厳然とあって、そこで得た知見が普遍的なものか、あるいはその地域だけの特異例か、即断できないことにある。地理学研究は帰納的である。その判断には「場数を踏むこと」や「他地域の事例や一般論(地理学者は理論とは呼ばないように思う)についての知識」が必要だが、卒業論文段階では場数はありえないから、効率よく幅広く文献調査しなければならない。筆者の結論は、「地理学には、基礎勉強と現地調査の両方をバランスよく期限内にこなせる人が来てほしい」。本稿のコピーが高知大学に流布すると困るが、「最低限、両者に気配りがあり論文形式が整っていれば、合格とする」方針である。

#### IV 地理学講義はすべて概論

「理」を訓読みすれば「ことわり」となり、現代用語でいえば「構成原理」というシステム論的な概念である。17世紀ころから、神様がシステムを創って運営しているという、お気楽な説明は通用しなくなってしまった。心理学は心(脳機能

とその表現形および人間関係)の構成原理を、地理学は地(空間諸要素)の構成原理を明らかにしようとする、「理」系分析的・実証的の学問といえる。

心も地も複雑な有機体だから、簡単には解明できない。地理学は記載学だと前述したが、それは分析以前に記載すべき事実の膨大さに振り回される、という意味にも解せる。そこで、地理学では表1のように空間要素を細分して研究が行われるが、いくらかは同系統の分野としてまとめられ、いくらかは学際的位置づけが与えられる。

小分類の数はメジャーなものだけでも30~50はある。したがって、教員数が多い大規模地理学科でも独立した講義科目として開講できず、中分類が採用されるのがふつうである。人間文化学科では地理学教員が2名なので、大分類で開講せざるをえない。これは、どの講義科目も「著しい簡略版」であることを意味する。ただしそれは、教員にとって「講じやすい」という意味では決してない。

したがって、地理学を専攻したい学生は、まず自分の興味範囲が表のどこに落ちそうかを考えなければならない。むろん、名称だけでは判断がつかないから、教科書や講座ものを独習すべきである。地理学は文学部系のなかではこれらの書籍が完備している分野であり、世界的に使われているスタンダードな教科書(むろん英語版)もある。卒業論文のテーマ設定の相談では、学生個人の興味を言われても曖昧なことが多い。そこで、3年次の演習で「この本の何ページあたり」と具体的に発表してもらえると目安がつけやすい。

#### V 地理学は独り立ちできない

次に考えるべきは、小分類ごとの関連分野である。しかし、勉学歴が浅く視野が狭い学生には判断が難しいので、やはりここでも演習指導が重要になる。例えば、環境地理学ふうの発表をして筆者から「環境法や環境経済学についても勉強すべ



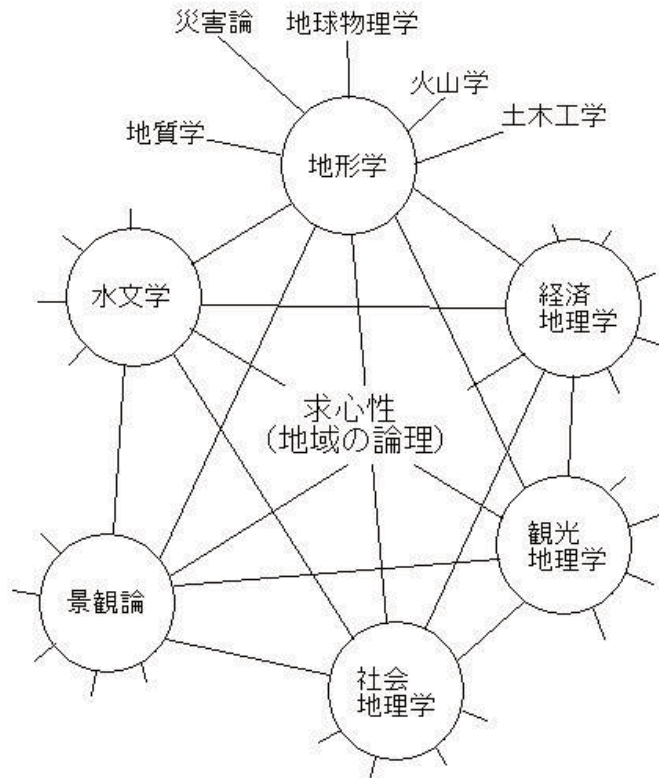


図1 地理学各領域の関連分野についての概念図

き」と言われたら、「法学」や「経済学」の書棚から該当する本を探してきて、基礎概念を理解しておくべきなのである。地理学は、研究対象ではなく研究視点で定義される学問分野だから、独り立ちできない。その関連文献は、図書館のどこに配架されているか、全く不定である。

他学部・学科に関連する講義があれば、積極的に受講に出向くべきである。すなわち、地理学は総合大学型学問の典型であり、昔の筆者はできるだけアドバンテージを享受しようと思った。しかし、筆者の指導学生でそれを実行したのは、過去にお茶の水女子大学の1人きりである。

どこの大学でも同様だろうが、3年次の演習で以上の作業を通じてやるべきことを明確にしていき、4年次の卒業論文に進んでいくことになる。

これは、「今年の演習では〇〇物語を読み、来年は〇〇日記を読もう」という文学系演習とは、性質が異なることに留意すべきである。

理想的には学会誌論文を読みこなせるようになればいいのだが、まずは学力不足のため、副次的には論文口調あるいは凝縮された記述様式に慣れないために、お手上げになってしまうのが高知大学の現状である。また、文学部系では単行本重視の風潮があるようで、学術雑誌の最新論文を読むという概念が希薄なことも、根本的に困った問題である。

## VI 再びヒマワリ曼荼羅

表1は、とくに変哲のない内容なので、おおか

たの読者の期待を裏切っただろう。実はこの表には、ヒマワリの舌状花に相当する関連諸分野が描き込まれていなかった。なぜなら、地形学の関連分野には地質学、火山学、地球物理学、水理学、土木工学、土壌学などがあり、図1のようにそれぞれの専門分野ごとに小さなヒマワリが咲くはずだからである。すべてを描き込むのは、図がやたらと細くなるという幾何学的理由と、筆者の勉強不足という学問的理由の両面から、はなはだ困難である。

この図は、例えば一人の地形学徒についてみた場合、常に関連諸分野からの引力を受けていることを意味する。土木工学を十分に勉強し、そちらでも論文が書けるようになって職も得られれば、古気候やら地下層序、土壌、水文などの理解をも要する面倒くさい地形学に戻ってくる必要はない。現業部門の土木工学のほうが圧倒的に資金も豊富にある。社会地理学徒であれば、社会科学の *networking*, *endogenous development*, *empowerment* などの頭の良さそうなキーワードを使いこなせるようになれば、わざわざ農村の泥臭い記事を重ねる仕事に戻ってくる必要はない。そんな気が起きてもおかしくはないのである。

地理学は常に分裂の危険をはらんでいる。このことは、たしか自分の学生時代にも習ったように思う。ヒマワリ曼荼羅の講義の後半部だったかどうかは思い出せない。「だから諸君はどうしろ」と習ったかもしれないが、これも思い出せない。

この分裂を食い止めることが是であり、それができるとすれば、その力は地理学の他の分野との間の引力であろう。しかし、社会地理学者(集合体)は地形学者(集合体)に対して「こっちを向いて頂戴」と言うてはくれまい。逆もそうである。つまり、学問分野としての引力は、地形学と気候学のような近傍間でなければ、期待できないのである。筆者は、地理学がいろいろな分野の寄合所帯であることをもって学際を標榜することには、(対外的な政治的意図がある場合を除いて)断固として反対する。

学際は、個人によって実現されるべきものである。これが杉谷の学問的個人主義である。筆者がもし社会地理学を必要とするならば、その成果や概念を借用しなければ、自分の研究のなかで地域に生起する現象の本質的な要素を漏らしてしまう、と筆者自らが判断するときである。地理学が分裂しないですむのは、このような「地域の論理」が個人において意識され、個人において地理学が生きつづけるときではないだろうか。

この最後の部分は、大学院でも講じたことはない。「先生もついに遠いところに行ってしまったんですね」と嘲笑されるだけだからである。

---

すぎたに・たかし

1990-2005 お茶の水女子大学に講師、助教授、教授として勤務

2005- 現在 高知大学人文学部人間文化学学科教授

## What is geography? : Introductory education at Kochi University after the interdisciplinary restructuring

SUGITANI Takashi (Kochi University)